

『メトセラへ還れ』における「創造的進化」

森 岡 稔

1. はじめに

ジョージ・バーナード・ショー George Bernard Shaw (1856-1950) は20世紀の初めに彼の「創造的進化」の思想をまず『人と超人』*Man And Superman* (1903) で戯曲化し、思索を深めた結果、その第2弾として預言的雰囲気をもつ『メトセラへ還れ』*Back to Methuselah* (1921年) を書いた¹⁾。彼は、それらの前後に創作した戯曲にも「創造的進化論」の片鱗をのぞかせている。「高次の進化段階」“the higher stages of evolution” や「超人」“Superman”，あるいは「生の力」“life force” や「心の目」“mind’s eye” などの用語で組み立てられた「創造的進化論」を彼は「20世紀の宗教」“the religion of the twentieth century” とまで言っている²⁾。

ショーは「創造的進化論」によって、現代人に物質主義的に生きることをやめて、知性的な生き方をすることを勧めた。「創造的進化論」が満載された『メトセラへ還れ』は、90ページにも及ぶかなり長い序文と、モーセの五書を意識した五部 (Pentateuch) で構成されている³⁾。ショーはこの作品を通して、物質主義的な世界観によって生命の活力を失いかけている世界に対し、明確な「進化目的」を示唆する「創造的進化論」を打ち出した。物質主義的な世界観とは何か。動物は環境に大きく左右される受動性を特徴とする。人間は動物ではあるが、知

力と想像力を結集した科学によってその受動性を克服してきた。だが、同時にその科学はそれまでの宗教的権威を失墜させてしまった。宗教的確信を失った人間は、精神的荒野に投げ出され、再び動物的で物質主義的な世界に逆戻りさせられてしまった。物質主義的世界観は、弱肉強食の戦争という悲惨な結果をもたらしてしまう。そこでショーは動物的生活から脱却し、高度な自己意識をもつ精神生活へと脱皮することをめざすことを人類に促したのである。科学が宗教的権威を失わせても、宇宙に目的がなくなったわけではない、とショーは考える。進化について言えば、彼はダーウィンの自然淘汰説と適者生存説に疑問を投げかける。ジャン＝バティスト・ラマルク Jean-Baptiste Lamarck (1744-1829) やサミュエル・バトラー Samuel Butler (1835-1902) から影響を受けた彼は、適者生存説のダーウィン主義を採らずに、独自の「創造的進化」を提唱したのである。彼は戯曲で人類史における進化の働きを展望するという大規模な試みを『メトセラへ還れ』で実行して見せたと言える。

『メトセラへ還れ』の序文によると、生き方が受動的・動物的・物質主義的な人間ならば、人生の目的は限られているので、短命でも充分だと考えるかも知れないが、知性と想像力をもった人間は、未来を見通す力と進化目的を持っているので、短命ではその目的を達し得ない。この場合、進化目的とは、人間が全知全能

で神性に近づくという壮大な目的である。この目的を意識的にも無意識的にも目覚めた人間は、長命になり得るといふ仮説をショーは考えた。その根拠は、知性の拡大は生命力を増進するというものである。彼によると、動物主義的な人間は、生命としての基本的欲求を満たしてしまえば、生活は惰性的に営まれ、倦怠をもたらすようになる。その結果、生命力は弱まる。一方、知性的な生き方をする人間は、知性の拡大は無限であるので、自ら新しい興味や挑戦を産み出し、生命力を強める。

「創造的進化論」は「創世記」の時代から気の遠くなるような未来の時代までを背景にした『メトセラへ還れ』の中に貫徹されているが、それがどのように展開されているか、以下、この問題について各部を追って考察していきたい。

2. 第1部 「人類の始まり」 “In The Beginning”

第2部は2幕で構成されている。第1幕は紀元前4004年のエデンの園が舞台で、登場人物はアダム Adam とイヴ Eve と蛇 The Serpent である。第2幕はそれより数世紀後のメソポタミアを舞台とし、登場人物はアダムとイヴとカイン Cain の3人である。第1幕では、動物的なレベルで生きているアダムは「永遠の生」を退屈なものと考えて愚痴ばかりをこぼしており、1,000年も生きれば充分だと思っている。そのような彼の生き方をめぐって、イヴと蛇が議論をする。第2幕では、アダムとイヴの間に生まれたカインが弟のアベル Abel を殺し、彼の人生観について両親と議論する。第1部の2つの幕で展開されるのは、人間の生と死、そして寿命の長さに対するそれぞれの考え方である。

2-1 第1部 第1幕

エデンの園で、アダムが子鹿の死骸を発見することから劇は始まる。アダムはイヴに子鹿の死をすぐに知らせる。子鹿は遊んでいるうちに、躓いて転んで死んだらしい。いわば、「不慮の死」である。「死」というものを知らなかった2人は、自分たちも子鹿のように死ぬかも知れないという危惧を抱く。アダムは死を恐れるが、一方では日頃永久に生きることへの倦怠感もおぼえているので、イヴに次のように愚痴をこぼす。

It is the horror of having to be with myself for ever. I like you; but I do not like myself. I want to be different; to be better, to begin again and again; to shed myself as a snake sheds its skin. I am tired of myself. And yet I must endure myself, not for a day or for many days, but for ever. That is a dreadful thought. (Part I, Act I, 343)

それは、永遠に自分自身とつきあっていかなければならない恐怖なんだ。僕はあなたが好きだけど、自分のことは嫌いなんだ。今とは違うようになりたい。よくなりた。何度もやりなおしたい。蛇が皮を脱ぐように今の僕を脱ぎ捨てたい。僕は今の自分にはうんざりだ。でも、自分に耐えて行かなければならない。耐えるのは1日とか何日とかじゃなくて、永久にだからね。そんな事を考えると恐ろしい。

アダムの倦怠は、実は進化の疼きである。アダムは、人間が食べて寝るというだけの動物的な生活よりも高次の意識をめざす精神存在であることを何となく意識し始めているのである。アダムが“to be better”と言っているのは、毎日毎日を同じように生きていくことに満足せ

ず、向上しようとする意識が働いている証拠である。

蛇は、脱皮して「生まれ変わる」ということに加え、「卵を産むこと」を発明した、とイヴに伝える。蛇によると、アダムとイヴをつくったリリス Lilith も子鹿の死を見て、新しい生を得ようと思い、自ら皮膚を脱いでアダムとイヴに分離・変身した。なぜ2つに分裂したかと言うと、新しい生を得ようとする苦しみは一人では耐えきれぬものではない、と判断したからである。また、リリスが変身することができたのは、蛇の示唆によって、変身を希望し欲求しつづけたからである。蛇は次のように説明する。

When Lilith told me what she had imagined in our silent language (for there were no words then) I bade her desire it and will it; and then, to our great wonder, the thing she had desired and willed created itself in her under the urging of her will. (Part I, Act I, 349)

リリスがその空想を私達の無言の言葉でお話なさいました（と言いますのは、その頃はまだ言葉がなかったからです。）その時私は、希望し欲求しなさいと申し上げたのです。そうすると、まったく驚いてしまいましたが、あの方が希望し欲求なさったことが、意志の力で、あの方の中に創造されたのでございます。

リリスは「意志」の力でアダムとイヴを創造したのである。つまり、偶然に生命が生まれるのではなく、創造には「意志」が介在しているということが強調されている。ショーが「創造的進化」を劇の中に盛り込んでいく最初の部分だと言える。

さて、「新しい生」が可能であることが明らかになったが、リリスはアダムに「生む」という力を持たせなかった。というのは、アダムがそのような力を持つと、イヴを必要としなくなるからである。したがって、アダムは欲求し希望して創造のための偉大な原動力として「生」を集中することはできるが⁴⁾、自分と同じ者を作り出すにはイヴの助けを必要とする。イヴは、新しいイヴを生んだ途端にアダムは若いイヴの方へ行ってしまわないかと要らぬ心配をするが、蛇から、新しいアダムばかりでも新しいイヴばかりでも、片方だけでは「新しい生」はできないと諭される。アダムとイヴで「新しい生」を作ることを蛇は「妊娠」“conceive”と言った⁵⁾。「妊娠」の他に蛇が繰り出した言葉の中に、たとえば、「他人」“strangers”というのがある。それは、イヴが新しいイヴを生んでもアダムと共有する思い出がないので、そういう者たちをどう呼ぶかということから考案されたものである。「結婚」“marriage”と「誓約」“vow”という2つの言葉は、アダムが倦怠から逃れるために生きる期間を1,000年と限って、イヴを愛し続けることを誓い、同様にイヴも誓ったことから呼称されたものである。このようにして、アダムとイヴは生きる期間を限定し、退屈や倦怠から解放され、個体が死んでも種が生き残る道を選択して「死」を乗り越えることができるようになった。

2-2 第1部 第2幕

第1部第2幕は、第1幕から数世紀経ったメソポタミアの菜園が舞台である。アダムとイヴは楽園を失い、この地でアダムは耕し、イヴは紡いでいる。そこへ、弟アベルを殺した人類最初の殺人者カインが登場する。カインには、父の労働はたまらなく単調で進歩のないものに思

われた。アベルは、すでに火を発明して祭壇をつくり、肉を食べて生きるようになっている。父アダムにしたがって土を耕していたカインは、アベルが獣を殺したように弟を殺してしまったのである。そして、カインはアベルのように土を耕さず獣を殺すことによって生きようと決心する。カインは、自分はアダムよりも優秀な存在だと信じて、次のようにアダムに自慢する。

He [Abel] laughed at me; and then came my great idea: why not kill him as he killed the beasts? I struck; and he died, just as they did. Then I gave up your old silly drudging ways, and lived as he had lived, by the chase, by the killing, and by the fire. Am I not better than you? stronger, happier, freer? (Part I, Act II, 362)

彼（アベル）は僕を嘲笑しました。その時、僕に素晴らしい考えが浮かびました。なぜ、彼が獣を殺したように彼を殺さないのだ。僕は彼を殴りました。すると、彼は死にました、獣が死んだように。そこで、僕はあくせく働くといった古くさくて馬鹿げたやり方をやめました。狩りをしたり、屠殺したり、火を使ったりして、彼が暮らしてきたように暮らしたのです。僕はお父さんよりも優れ、強く幸福で、自由ではありませんか。

カインは、戦うことに生き甲斐を見つけ、戦う生活を真の生活だと勘違いをし始めた。戦わない人間は刺激のない、つまらない生活をしている馬鹿者だとさえ思っている。カインによると、父アダムはイヴによって使役され、彼女の使い勝手のいい道具になりさがるのに対し、自分は戦うことによって勝利し、獲得した戦利

品の一部を女に与えるという主体的で男性的な生き方をしている。カインのようにするのが男らしい生き方だとし、力の支配や物質の占有が幸福なのだ、という考え方が人類史上どれだけ優勢であったことであろうか。ショーは、カインのような考え方を愚蒙だとし、物欲に振りまわされる感覚的快樂生活を軽蔑する。この愚かしさが戦争を巻き起こしたり、文明の危機を招いたりしたのである。

ショーは、人間の本性を「善」「good」だと考えていた。その「善」が個人的に意識されると、それは人間の「意志」「will」となる。「意志」は外の世界である環境に向かって働く時、社会を改革しようとして社会全体の進化を目指す。一方、「意志」が、内なる世界に向かう時、個人は進化目的に目覚める。もちろん、この2つの意志の働きは、両方とも人類の進化にとって欠かせないものである。カインが、自己の欲望にとられる時、自己の意志が強固であるように見えるが、実際には内心はこの上なく空虚である。それは、本来「善」である「意志」を裏切っているからである。ショーは、人間は物質的に豊かな生活ではなく精神的に豊かな生活をするのが、人類がめざすべき健全な在り方だと考えていた。しかし、カインは人類史上における最初の殺人者であるとともに物質主義的思考を持った者である。彼は女性を愛の伴侶ではなく「奴隷」「slave」としてとらえ、戦い勝ち取った「戦利品」「booty」だと考える。イヴはこのように豪語するカインに対して、自分のことを主人のつもりで思っている、しよせん妻のルア Lua を喜ばせるために命がけで働いている奴隷にすぎない、と言って非難する。物欲という関係で成り立っている夫婦は、人格を尊敬しあっているのではない。夫のもたらす戦利品と権力で結びついているのである。

カイン自身は空しさをひきずりながらも、好戦的な性格によって生きる実感を得ている。それは自己満足的なものであるが、彼によると、勇気こそが生命の血潮を深紅の輝きにまで高める。しかし、イヴはそのような彼に対して、それは「怠惰」だと言う。つまり、生命の創造者として子供を産む女と、破壊者である男とでは、生きる意味が違う。生命を創造することは手間のかかる難しい骨の折れることであるのに対し、カインのように他人の作った生命を盗むことは手間のかからない罪なことである。カインは物欲を追求する最初の典型的な人間であるから、物質による力を蓄えて権力を集め、人を支配することを身上とする。たとえ、それが略奪行為であっても、弱肉強食としてのいわば適者生存“the survival of the fittest”なのである。「エゴイズム」はここから始まり、それが強くなってくると、食うか食われるかの危機感が常に身辺につきまとい、心休まることなく慌ただしい生活を余儀なくされる。物質を集めても、適量という自制は働かず、際限のない望蜀の念に駆られる。自分以外はすべて敵であり、人を愛する気持には当然なれない。頼れるのは自分の力のみである。力の増大が生きている存在理由・目的となり、欲望が生きる原動力となる。そういった世界観の裏側は、実は絶望に裏打ちされている。イヴはそれを見抜いたのである。彼女によると、カインの考え方は「創造的進化」を支える「生」よりも「死」の方が打ち勝っている⁶⁾。

イヴはカインのような息子ができたことを悔やむが、まだ自分には「希望」があると言う。その「希望」とは、夢が実現されるという「希望」である。イヴによると、夢を見ないと、創造するだけの「意志」を持つことができない。蛇が言ったように、充分信じることによって、

夢は「意志」の力によって創造される⁷⁾。まさに、「創造的進化論」の中の「夢（想像力）」—「意志」—「創造」—「希望」の連鎖がここで表されている。

イヴが作り上げた人間には、すでに、芸術家や天文学者や預言者など、創造的なことに携わる者たちがいる。そのことが彼女にとってこの上ない喜びである。人間は物欲だけで生きるのではなく、何かは分からないが「それとは別のもの」によって生きていくことができる。物質主義的な生き方ではなく、精神性を深めるという「創造的進化」の目標が暗示されて第1部は終わる。

3. 第2部 「バーナバス兄弟の福音」“The Gospel of The Brothers Barnabas”

第2部の時代背景は、第1次世界大戦（1914-18）直後である。第1部のカインを取り巻く「物質と権力の獲得」と「戦争」のテーマがここで追究されている。時は1920年、ロンドン郊外にバーナバス Barnabas 兄弟が住んでいる。かつて牧師であった兄のフランクリン・バーナバス Franklyn Barnabas は元自由協会の会長で、政治家にも顔のきく有力者である。弟のコンラッド・バーナバス Conrad Barnabas は生物学者である。この兄弟は協力しあって人類の文明の行く末がよいものであることを願っている。彼ら兄弟は、共同研究の結果、人間の生命は少なくとも300歳を必要とするという結論に達した。その結論の趣旨は、人間は現在のような100歳未満の短命では自分の愚かさに気づき自分のすべきことを悟った時には時期すでに遅く、その目標を達成することはできないというものである。

牧師のハズラム Haslam がバーナバス兄弟を

訪ねて来る。元牧師の小間使いが村の樵と結婚するので、ハズラムに仲介の労をとってくれるよう依頼していた。ハズラムは、この世間的な体面だけを気にした結婚は軽率だと思っている。フランクリンも、彼女が真剣に人生というものを考えていない、と言って彼女の結婚に否定的である。彼は次のように彼女の状況を説明する。

She [The Parlor Maid] hasnt time to form a genuine conscience at all. Some romantic points of honor and a few conventions. A world without conscience: that is the horror of our condition. (Part II, 383)

彼女（小間使い）は純粋な良心を形成する暇が全く無いのです。体面に関する若干の空想的な事と習慣だけです。良心のない世界。これこそ我々が今置かれている恐怖すべき状況なのです。

フランクリンは、外面的な生活に追われずに、人は精神的な充実と成熟を目指すべきであると説いている。彼はそれを端的に「良心」「conscience」という言葉で表現しているのであるが、ショーの推奨する「真剣な生活」は「良心」という語よりも意味がずっと深いものである。「真剣な生活」を営むことに気付くには、現状の人生は短かすぎる⁸⁾。第2部は、いわば、それを明らかにしていく助走の段階であるから、「真剣」というよりも「良心」というわかりやすい表現をとったのだと思われる。

この小間使いは、のちに第3部「事が起こる」「The Things Happen」において、長寿（長命人）のルートストリング夫人 Mrs Lutestring として再登場する。小間使いは、コンラッドが書いた『バーナバス兄弟の福音』*The Gospel of The*

Brothers Barnabas という本を、バーナバス家の料理人と一緒に読んでしまっていた。フランクリンのお転婆娘サヴィ Savvy が一語たりとも読まないのに、小間使いと料理人が自分の本を読んだことにコンラッドは驚く。この小間使いが、「長寿の本」を読んだためにのちに長寿になってルートストリング夫人になる布石がここに施されている。

ジョイス・バージ Joyce Burge とヘンリー・ホプキンス・ルービン Henry Hopkins Lubin という2人の老政治家が相次いで訪ねて来る。彼らは、フランクリンがミドルズバラ Middlesborough の集会で演説することを総選挙に向けた選挙運動だと勘違いしている。したがって、彼らは互いにフランクリンを自分の陣営に引き込もうという腹である。これら政治家は、バージがデイヴィッド・ロイド・ジョージ David Lloyd George (1863-1945)、ルービンがハーバート・ヘンリー・アスキス Herbert Henry Asquith (1852-1928) がモデルだとされている。フランクリンは彼らの訪問を利用して、バーナバス兄弟の長寿の学説を政治家がどのように思っているかを探ってみることにする。なぜなら、兄弟は長寿の学説が本当に世間に受け入れられるかどうか不安だったからである。

バージは連立内閣から脱退し、今は在野党となった自由党の元内閣首相である。もちろん、彼はダンリーン Dunreen 保守党内閣を快く思っていない。バージは社会主義者フランクリンが自分に味方してくれると勝手に思っていたのだが、フランクリンは意外にもそのダンリーン卿の肩をもつ。さらに、ルービン首相のもとで働いていたバージの戦時中における政治態度に信念や主義がなかったと非難し始める。バージは、当時はドイツの圧迫による危急存亡の時

だったので、反対党の保守党と連立政権を組まねばならなかったと弁解する。70歳にならんとする自由党総裁のルービンは、さかんに若いサヴィの機嫌をとろうとする。そうすることによってフランクリンの歓心を得て、バージより11歳年上であるハンディを乗り越えて、政敵よりも政治的に有利になることを目論んでいるからである。一方、ルービンは躍進しはじめた労働党の非難を始める。彼によると、労働党は社会主義的経済学を科学的普遍法則として無理に実際の政治にあてはめようとしている。

サヴィもいろいろと政治について口をはさんで意見を言うが、皆に子供扱いをされて面白くない。彼女は業を煮やして、『バーナバス兄弟の福音』の本の内容を政治家たちに聞かせたらどうかと提案する。図らずも彼女の口から最初に本の存在が明らかにされてしまう。それを聞いたルービンとバージはフランクリンが新党を作るつもりなのか、と勘違いをする。彼女は勢いに乗って、ついにその本のスローガン「メトセラ時代に還れ」“Back to Methuselah!”⁹⁾と爆発的に叫んでしまう。コンラッドは、政治的な失敗などは長寿によって解決できると信じている。彼によると、人間は短命であるので、未成熟のままに政治や社会の問題を取り扱っている。それ故に戦争などの不幸な結果を招いているのである。コンラッドが人間の短命による不幸な結果を力説しても、政治家たちは選挙という目先のことしか考えない。ルービンもバージも敵対心を剥き出しにして相手を攻撃し始める。醜い論戦が政治家たちによって長々と展開されるので、政治の不毛さがよりいっそう浮き彫りになっていく。ルービンはバージのことをただ元気があるだけで、悟性や知識がなく心も練れていないと言い、バージはルービンのことを先見の明や反省、記憶力や持続力がなくと非

難する。フランクリンは、表面的にはレフリーのような形をとりながら、実際には両者を批判的に見つめており、第一次世界大戦の責任は目の前の2人に象徴されるヨーロッパの政治家の無能さにあると弾劾する。

コンラッドは、だから長寿が文明に必要なのだと訴える。つまり、無能は人間の未熟さの結果であり、未熟さはとりもなおさず寿命の短さに由来する。その欠点を断ち切るには、寿命を長くすることが不可欠である。現実には、外面的で享樂的な生活に甘んじ、精神的な成熟もせずに生涯を終わっている。文明がそのような皮相的なところで終わってしまっているのは、いつまでたっても低級な堂々巡りをするだけである。

ルービンは、長寿になる方法がまだ「福音」ではなくて、即物的なものだと錯覚し、コンラッドに不老不死の霊薬を発見したのかと尋ねる。ルービンもバージも「バーナバス兄弟の福音」を理解するには根本的な限界があるのである。そこで、フランクリンは宗教的な見地から、エデンの園の話を持ち出して彼らへの説得の糸口にしようとする。

第1部の「人類の始まり」では、子鹿の「不慮の死」を見て、アダムとイヴは初めて死というものに直面した。その時、アダムは永久に生きるということに倦怠を覚えていた。不死が重荷になっていたわけであるが、そうかといって死による人類の断絶にも耐えられない。その結果、アダムとイヴは「自然死」と「自然誕生」というものを発明しなければならなかったのである。人間が「死を免れない」“mortal”存在になったのは、この時からである。

フランクリンは、エデンの園の話を持ち出したあと、人類が何を追求しているかを述べる。ショーはこの場面によって「創造的進化論」を明らかにしていく。『メトセラへ還れ』をドラ

マとしてみると出来が悪いと批判されることがあるが、思想書としてこの劇を読んだ場合、フランクリンのセリフによる「創造的進化」の説明は真にすばらしいものである。

The pursuit of omnipotence and omniscience. Greater power and greater knowledge: these are what we are all pursuing even at the risk of our lives and the sacrifice of our pleasures. Evolution is that pursuit and nothing else. It is the path to godhead. A man differs from a microbe only in being further on the path. (Part II, 423)

全能と全知との追求です。より偉大な力とより偉大な知識です。我々が生命を賭して快樂を犠牲にしても追求しているのは、それらのものです。進化はその追求であって、それ以外の何物でもありません。それは神性に至る道です。人間が微生物と違うのは、ただ、この道のりの遙か先にいるからです。

フランクリンは「創造的進化論」の要諦を示したあとで、「墮落」の問題に言及する。生命が永遠から有限になったことにより、もはやこの世は手数をかける必要のないところとなり、その結果「墮落」が始まった。アダムとイヴが出産を發明したことにより、イヴの代わりがいつでも得られるようになったので、アダムは勝手気ままになり、それが人類の「墮落」の第一歩となった。「墮落」は、肉食、殺害、暴力、戦争へと拡大していった。その責任の一端は科学にもあるとフランクリンは類推する。彼は、科学者は何でも説明できるはずだから、どんなことでも説明する義務があると言う。コンラッドも、「創世記」が系統発生史として説明できるのではないかと皮肉っぽく言う。バーナバス

兄弟は科学の還元主義的、機械論的、決定論的性質を批判しているのである。

ショーは『メトセラへ還れ』の中で科学的唯物思想に対して盛んに攻撃の矢を射っている。機械論は原因と結果を追求するあまり、偶然による確率を判断の基準とする。人間も部品を寄せ集めたロボットのようなものにすぎなくなる。原因と結果の信仰は決定論に結び付く。ここでは、運命に対して人間の意志は働かず、運命に対して人間が果敢に立ち向かって新しい世界を切り開いていく姿は望めない。機械論においては、人間はいかにも受動的な人間にならざるを得ないのである。そこでショーは、序文で、ダーウィン主義的唯物論・機械論とは反対の「創造的進化論」を意気盛んに唱える。

But this dismal creed [Darwinism] does not discourage those who believe that the impulse that produces evolution is creative. They have observed the simple fact that the will to do anything can and does, at a certain pitch of intensity set up by conviction of its necessity, create and organize new tissue to do it with. To them therefore mankind is by no means played out yet. (Preface to BM, 267)

しかし、この陰鬱な信条（ダーウィニズム）は、進化を生み出す衝動が創造的だと信じる人々を失望させることはない。創造的な進化を信じる人々は、何かをしようとする意志が一定の強度でその必要性を確信することによって、それを行うための新しい組織を作り出し有機化するという純然たる事実を見てきた。それゆえに、創造的進化を信じる人々にとって、人類はまだ決してすべてを成し終えてはいない。

第1部で蛇が言ったように、「創造的進化」は人間の「意志」の働きである。「意志」によって新しい自己や新しい環境を作り出す。確信的な「創造的進化」の強烈な「意志」は、創造的に新しい組織を生み出していく。したがって、「創造的進化論」は機械論とは対蹠的な生命主義的な特色をもつのである。

フランクリンは、中世のキリスト教がその知的根拠をアリストテレスにおいていたことに対するアナロジーとして、「20世紀の宗教」である「創造的進化論」は現代の哲学と科学に知的根拠をおくものだとする。

ところが実際には、ショーが生きていた時代は客観的物質的科学が支配的であった。この時代の一般の人々は、物質主義的科学主義がゆるがせない「信条」“creed”であったのである。彼が一生懸命に「創造的進化論」を唱えても、その意義は理解されなかった。彼はその残念な気持を序文で次のように吐露している。

The Neo-Darwinians were dominating biological Science. It was 1906; I was fifty; I published my own view of evolution in a play called *Man and Superman*; and I found that most people were unable to understand how I could be an Evolutionist and not a Neo-Darwinian, or why I habitually derided Neo-Darwinism as a ghastly idiocy, and would fall on its professors slaughterously in public discussions. (Preface to BM, 259-60)

新ダーウィン主義は支配的な生物科学であった。1906年、私は50歳であったが、その時、私は『人と超人』という劇の中で進化についての私自身の見解を公表した。しかし、大部分の人は、私がいかに新ダーウィン主義者とは違う進化論者であるか、新ダー

ウィン主義者たちをものすごく智恵の遅れた者として馬鹿にして、人前で議論する際に、なぜその専門家たちを残忍なまでに攻撃したのかを理解できなかったのだ。

ショーの「創造的進化論」が同時代の人々によって理解されなかったように、第2部において、バーナバス兄弟がバージャルービンに古い考え方を捨てて新しい進化論を政治的に受容するようどれほど熱心に勧めても、バーナバス兄弟の主張は理解されない。しかしコンラッドは、ダーウィニズムに対抗するような形で科学や哲学や宗教がしだいに「創造的進化論」へと集中してきており、「自然」は飛躍的に進化すると述べる。彼によると、人類がまだ進化の途上にあり、高度の文明に適合する新しい生命形態が今の人類に取って代ることが予想される。それがいったん起こり始めると、急激に事態は変わると予想する。フランクリンも、人間に神が命令した仕事ができないのなら、神は人類の文明問題を解決できる別の生物を創造するだろう、と言う。

ところが、やはりバージョとルービンは長寿が精神的な次元で導かれることの意味が分からずに、あいかわらず「特効薬」を製造することを考え、薬の生産量の胸算用をする。政治家たちには、長寿に必要なのは精神的な「自覚」であるということがまったく理解できない。人類の目指すべき目標を全くもたない蒙昧な政治家たちは非難されこそすれ、まったく尊敬の対象とはならない。第2部では、現実の社会を反映したこのような政治家たちを笑っているのである。

人間は進化目的を「自覚」すべきなのであるが、それに気付かず、意識変革を怠っている。感覚的な満足をもとめ、享乐的な人生を送ることだけに熱心な現代人は、精神的な向上が大切であることを分かっているが、なかなかその

ような努力をしない。そういった怠惰な心持が「自覚」を阻害している、とコンラッドは次のように辛辣に言う。

The men who want to live for ever wont cut off a glass of beer or a pipe of tobacco, though they believe the teetotallers and non-smokers live longer. That sort of liking is not willing. See what they do when they know they must. (Part II, 433)

永遠に生きたいと願ってはいても、禁酒家や禁煙家が長生きすることを知っていながら、ビールや煙草を止めようとはしない。好みというこの種の性向は、しようと思っする意志が介在しているではありません。そのような人間でも、せねばならぬ、ということを知った時、どういう行動をするか、見ていてごらん下さい。

ショーは、「意志」を働かせ自制心を育てなければならぬと言う。彼の場合、「創造的進化論」において「意志」が自制心を育てる過程は、そのままダーウィニズム批判と結びつく。「自然淘汰」をめぐって、自制心について次のような記述が序文に見られる。

What is self-control? It is nothing but a highly developed vital sense, dominating and regulating the mere appetites. To overlook the very existence of this supreme sense; to miss the obvious inference that it is the quality that distinguishes the fittest to survive; to omit, in short, the highest moral claim of Evolutionary Selection: all this, which the Neo-Darwinians did in the name of Natural Selection, shewed the most pitiable

want of mastery of their own subject, the dullest lack of observation of the forces upon which Natural Selection works. (Preface to BM, 309)

自制心とは何か。それは、単なる欲求を支配し調節する高度に発達した生命感覚である。この至高の感覚が存在していることを見逃し、これこそが生存の適者を識別する特性であるという明白な推論をやりそこなうこと、つまり進化の選択の最も高次な道徳的要請を度外視してしまうことこそ、新ダーウィン主義者が自然淘汰の名において行ったことであり、これは、彼らが哀れにも彼らの主題をマスターしておらず、自然淘汰の基礎となっている力を彼らが愚鈍にも観察しそこねていることを示している。

新ダーウィン主義者は自然淘汰そのものの中に「意志」が介在していることを見逃している。この点をショーは鋭く批判しているのである。彼らは、自然選択に「道徳的要請」という進化目的に欠かせない要請があることも見逃している。自然淘汰には欲望をコントロールする「意志」が働いているのである。

フランクリンによると、『バーナバス兄弟の福音』にあるような「長寿」の可能性は、望むからではなく、内部に深くひそんでいる魂が何をなすべきか知っているために、「内的強制力」が働いて起こるのである。「長寿」はひょっとしたら小間使いに起こるかも知れない（実際に小間使いが「長寿」を得てルートストリングス夫人になったことは既に述べたが、他にも牧師のハズラムが「長寿」を得る）。この内的強制力は、ショーの言う「生の力」“Life Force”に相違ない。心の表層では信じていなくても、深層で「長寿」の必然を意志をもって確信するも

のだけが「長寿」をかち得て自分の使命を実現していくのである。

ところで、進歩的なサヴィは後にハズラムと結婚するが、彼女には「長寿」が起こらない。なぜ、彼女には「長寿」が起こり得なかったのか。やはり、彼女は進歩的だと自分では思っているが、外面的な慣習にとらわれる人間だったようである。心の深層でそれを確信することが必要であるし、そうするためには、慣習的で古い因習から自由であることが条件となってくる。皮相的な階級意識から離れられないサヴィが、小間使いに「長寿」の可能性があることを想像しただけで腹をたてる。そのシーンが象徴的である。

I can believe, in a sort of way, that people might live for three hundred years. But when you came down to tin tacks, and said that the parlormaid might, then I saw how absurd it was. (Part II, 437)

人間は300年生きられるのだということは、ある意味では信じられます。でも、話がかくだけてきて、お父様が小間使いもそんなに長く生きられるだろうと言った時、何てばかばかしいことだろうと思いましたわ。

政治家たちと同様、サヴィは「福音」をナンセンスだと深層で思い、「福音」の必然を信じなかった。インテリである政治家たちは機械論的科学主義にとらわれていて、即物的・近視眼的の思考から抜け出せない。同じように、慣習に束縛されているサヴィには、「長寿」を実現する「生の力」が働かなかった。一方、小間使いは、機械論的科学主義に汚染されていないから「生の力」が素直に働いた。そのため、「長寿」が実現したのである。

4. 第3部 「事が起こる」 “The Things Happen”

第3部は全体で1幕である。時代は第2部から250年を経過した紀元2170年であり、舞台はイギリス諸島の大統領公邸である。イギリス大統領のバージ・ルービン Burge Lubin の部屋に主計監のバーナバス Barnabas と、書記官長の孔子 Con-fucius がいる。残された映画の記録から、ヨークの大僧正 Archbishop of York が「長寿」であることが発覚する。彼は50歳ほどにしかな見えないが、実は283歳の「長命人」である。この大僧正の正体は第2部で登場した牧師のハズラムである。若くて美しい内務大臣のルートストリング夫人も登場するが、彼女は275歳である。第2部のフランクリン・バーナバスの小間使いが「長寿」を得てルートストリング夫人となったのである。いずれも1924年の『バーナバス兄弟の福音』という本を読んだのであった。ルートストリング夫人はその本を読んだ時、そこに書かれていることは不可能だとは思わなかった。それ故に真理が「閃光」 “flash” のように現れたのである。

ルートストリング夫人が今悲しいと思うことは、自分と同じように成熟した人間に会えなくて孤独を感じていることである。彼女は樵と結婚したあと、101歳の時に画家と再婚した。彼女は、その再婚した夫もやはり70歳そこそこの「短命」であったために偉大な画家になることができなかったと述懐する。彼女自身も自分が成熟するのに100年かかったと述べている。紀元2170年において、市民が公認されている生存年齢は78歳である。ハズラムも彼女も300年近く生きているが、それでは公金を盗むようなものだ、とあって主計監バーナバスがきっと憤慨するだろうと考える。

バーナバスは、実は第2部の生物学者のコンラッド・バーナバスの子孫である。彼は「長命人」の2人が結婚しようとするので、それを阻止しようとする。なぜなら、彼の見解では、「長命人」は「短命人」を小馬鹿にしているし、「長命人」が増えてくると「短命人」を必要のないものと見なして「短命人」を滅ぼしてしまおうとするに違いないからである。彼は早く「長命人」を撲滅すべきだといきまぐが、大統領のバージ・ルービンと書記官長の孔子は、「長寿」の進化についてある程度の理解を示しているので、彼の意見を採りあげない。

5. 第4部 「老紳士の悲劇」 “Tragedy of an Elderly Gentleman”

第4部は3幕構成となっている。第1幕の舞台は紀元3000年のアイルランドの波止場であり、第2幕は円柱のある寺院の玄関前の中庭が舞台である。第3幕は、その寺の内部が舞台となる。第4部の時代では、世界は今や「長命人」と「短命人」に住み分けをしており、前者はかつてアイルランドであった土地にまとまって住んでおり、後者はバクダット Baghdad を首府とするイギリス連邦 the British Commonwealth という別の国に住んでいる。選挙の日をいつにしたらよいか、「長命人」の巫女の託宣を聞くために、「短命人」の政治家集団がアイルランドにやって来るという話になっている。「長命人」と比べて「短命人」がいかに愚かであるかが描かれている。

5-1 第4部 第1幕

紀元3000年、「短命人」の老紳士が「長命人」の国アイルランドを訪ねて来た。ところが、アイルランドの波止場に上陸したとたん、

気分が悪くなって倒れる。女性保安員が派遣されて老紳士を救助し、老紳士は「気落ち病」 “discouragement” に罹っていると診断する。「気落ち病」とは「短命人」が「長命人」の国に来ると罹る病気である。女性保安員は次のように老紳士に病気について説明する。

I am afraid you are not well. Were you not warned that it is dangerous for shortlived people to come to this country? There is a deadly disease called discouragement, against which shortlived people have to take very strict precautions. Intercourse with us puts too great a strain on them. (Part IV, Act I, 493)

具合が悪いようですね。短命人がこの国へ来るのは危険だということを警告されなかったのですか。ここには「気落ち」という恐ろしい病気があるのです。「短命人」はそれに対してよほど気をつけていなければなりません。私たちと交際する時は、精神的な緊張を強いられますよ。

「短命人」が「長命人」の国で生きるには、「長命人」の持つ無尽蔵の精神エネルギーが必要である。「短命人」である老紳士にはそのエネルギーが欠けている。ちょうど海で生きている生物が陸に上がると干上がるのに似ている。「短命人」が「長命人」と比べて、進化において劣っていることが分かる。

老紳士の婿バジャー・ブルービン Badger Bluebin 首相一団が政治上の決定について神託を聞きに来ていたが、老紳士はこの一団とは別行動をとっていた。老紳士は、島に上陸してから「長命人」のゾジム Zozim という付き添い人からはぐれてしまった。ゾジムは95歳の「第1

期」の人間である。長寿国では、100歳ごとに「第1期」「第2期」と数える。上記の女性保安員は179歳の第2期であったので、老紳士は精神的に疲れてしまった。第1期のゾジムは50歳であると言えども、長寿国ではまだ少女扱いにされている。「短命人」には付き添いが必要なので、新たにズウ Zoo という名前の第1期女性保安員の応援が頼まれたのである。老紳士は、ズウとのよく通じない会話の中で彼女から「お父ちゃん」「Daddy」と呼ばれるようになってしまう。ズウは老紳士との話の中で、「短命人」の短所を次のように挙げる。

Why do you shortlivers persist in making up silly stories about the world and trying to act as if they were true? Contact with truth hurts and frightens you: you escape from it into an imaginary vacuum in which you can indulge your desires and hopes and loves and hates without any obstruction from the solid facts of life. You love to throw dust in your own eyes. (Part IV, Act I, 511)

あなた方短命人たちは、なぜこの世に関してつまらない話を作り上げようとしたり、まるでそのお話が本当であるかのような行動をとったりするのでしょうか。真実に触れることはあなた方を傷つけたり、驚かせたりするのですね。あなた方は真実から逃げ出して想像という真空の中にお入りになるのです。そこでなら、人生の厳しい事実から少しの妨げも受けないで、欲望や希望や愛や憎しみにふけることができますからね。あなた方は好んでご自分の眼の中にごみを入れようとなさるのです。

「リアリスト」であるショーの面目躍如といっ

たところである。現実を直視せず、「理想主義」「Idealism」に逃避してしまえば、真実が隠蔽されてしまって真剣に生きていくことができない。「長命人」は、そこが「短命人」の悪いところだと指摘するのである。物事をありのままに見ることがきわめて重要であり、「理想主義」によって曇らされた目では、真実を正しく見ることができない。「心の目」「mind's eye」で現実をしっかりと認識することが肝要である¹⁰⁾。

文明の話になると、老紳士は急に熱弁をふるい出す。彼によると、個人が滅びても種は残り、松明を時代から時代へとリレーして送るように文明を継続し発展させることができる。ズウはこれに対し、松明を次世代に渡していくのはよいが、松明はだんだん萎んでいく危険性があると指摘する。松明を受け取った個人が自分自身でそれを燃え立たせなければならないというわけである。それは、「短命人」である現代人に対する「長命人」の警告だと解釈することができる。

ズウが言うには、人間が賢くなるのは、過去の回想によってではなく、未来に対する責任による。未来を創造していくという責任を深く認識し、行動を正しいものにしていかなければならない。単なる欲望に踊るのではなく、建設的に、そして創造的に文明を作っていくことを意識しないと、ただ受け継ぐというだけでは、文明は萎んでいくだけである。そのいい例が「未熟」の力が世の中を支配する時代である。暴圧政治と軍国主義がその典型である。ズウはそのように先輩の「成熟人間」から教えられていて、「未熟」とはどういうものかがよく分かっている。彼女の言葉によって、「創造的進化」が未来に対する責任を負っているものであることが明らかにされる。

「短命人」の国の首相が「長命人」の国へわ

わざわざ来て神託を聞くのは、その権威を利用したいからである。それまでも、「短命人」の政治家は神託をほとんど自分たちの都合のよいように改ざんし宣伝してきた。それは未熟な「短命人」たちがしそうなことであり、そういう未熟な人間たちが実際に政治に従事しているわけである。ズウは神託を聞きたいと言う老紳士を寺院へ連れて行く。

5-2 第4部 第2幕

第4部第2幕の舞台は寺院の玄関前の中庭である。ナポレオン一世の化身が登場する。彼はテュラニア国 Turania の皇帝であり、正式な名前はカイン・アダムスン・チャールズ・ナポレオン Cain Adamson Charles Napoleon である。名前の中にカイン Cain が入りこんでいることに注意する必要がある。この男の才能は虐殺を組織することであって、彼は暴力こそが英雄の条件だと考えている。第4部第1幕で取り上げた「未熟期」の人間の根底にある暴圧政治と軍国主義の考え方がこのナポレオンの化身に踏襲されている。彼が戦争の指揮をとり続けるのは、戦争が自分の得意とするところであるし、権力を維持するにはそれをやり続けることしかないからである。ナポレオンは英雄だから戦争をするが、兵士たちは実は臆病で死を恐れている。それなのに彼らを戦場に駆り立てるのは、彼によると、栄光を得ようとする欲望、臆病者の汚名を着せられることに対する羞恥、恐ろしい試練の中に自分を試そうという本能、敵に殺されたり捕虜になったりするかもしれないという恐怖、そして家庭を護っているという信仰にも近い決意である。戦争はナポレオンを歴史的に不滅の英雄にしたが、戦争を続ければ権力の座から追われることもあるだろうし、戦争が終わればただの人である。この「英雄」は外面的な空

威張りを長く続けることができずに、卑小さを暴露しながら退場していく。

5-3 第4部 第3幕

第4部第3幕の舞台は寺院の内部である。預言者から神託を聞くためにやってきた首相とその公使一団、及び老紳士と一緒に登場する。いよいよ神託を聞く場面である。預言者は年齢が第2期の170歳である。公使たちの質問は、選挙をいつの日にしたらよいかというものである。神託として語られる言葉は、いつの場合も「帰れ、馬鹿者」“Go home, poor fool.”である。為政者はこの神託を自己正当化のために改ざんするのである。「短命人」たちがありがたがっている神託は実はこのようなくだらないものと気づかされ、観客もあっけにとられて笑いを誘う場面である。それは現代人の欺瞞性をも同時に象徴している。

老紳士は、「長命人」たちの真実の生活を知って、あまりにも強く「長命人」から影響を受けてしまったので、「短命人」の国へ帰りたくなってしまう。そうこうしているうちに老紳士は疲労してしまい、「短命人」としての自分の未熟さに落胆しながら息をひきとる。第4部では、ズウと老紳士との会話によって現代人の虚偽に満ちた生活が暴露され、人間としてあるべき姿が描き出されている。

6. 第5部 「思想の達し得る限り」“As Far As Thought Can Reach”

第5部は約3万年後の紀元31,920年の未来世界であり、全体は1幕で構成されている。しかし、便宜的に5つに分けると、この劇の理解がしやすい。

『メトセラへ還れ』で伝えたかった「創造的

進化論」はここで完結する。預言的な雰囲気をもつ第5部では、人類の行く末について想像力たくましく描かれている。「短命人」はすでに存在しない。長寿の世界で古老となっている「古代人」が総合的な進化ヴィジョンを「子どもたち」（実は3歳の大人）に説明するという設定になっている。科学は極限にまで発達してしまって、古代ギリシア風の簡素な生活に戻っている。人類は精神生活をしているので、もう機械を必要としない。人間は卵生となって出産の苦痛から解放され、長寿を通り越して「不死」になっている。誕生までは卵の中で2年間育てられ、その間に不安定な精神的の時期を過す。孵化する時には、既にある程度育ててしまっている。孵化してから15カ月間は、現在の人間で言えば「少年期」、その後の4年間は「壮年期」に相当する。「少年期」も「壮年期」も精神的に発達を遂げていない、言わば「未熟期」である。それが終わると、不死の「成熟期」に入ることになる。第5部は、ショー独特の芸術論も展開されて魅力あるドラマの構成となっている。

6-1 第5部 その1

第5部は、日当たりのよい林間の空地で「未熟期」の男女が踊っているところから始まる。そこへ、ほとんど裸身の「成熟期」の人間「男古代人」The He-Ancientが現れる。100歳を「1期」と数えると、彼は「第7期」になる人間である。ストレフォンStrephonという名の「未熟期」の人間が、夢遊病者のように歩いている古代人に、危ないから気を付けて歩くようにと注意する。「男古代人」は瞑想をしながら歩いているからである。遊戯的享楽生活を送っている「未熟期」のストレフォンが、「男古代人」の様子を見て、「みじめだ」「miserable」と言うと、「男古代人」は彼を次のようにたしなめ

る。

Infant: one moment of the ecstasy of life as we live it would strike you dead. (Part V, 567)
幼子よ、私が味わっているような生の恍惚の一瞬でもあなた方を打ち殺してしまうでしょう。

無尽蔵の精神エネルギーをいつでも引き出せるように進化した「男古代人」は、自在に「生の恍惚」“the ecstasy of life”にひたることができる。しかし、「未熟期」の若者たちはまだ物質的な生活から抜け出せないの、その精神エネルギーの奔流にあうと溺れてしまう。

「未熟期」の人間たちの中に、成熟しかけた女クロエChloeがいる。彼女は成熟しかけているので、もう踊りなどをして遊ぶ快樂生活に飽き始めている。クロエとストレフォンは恋愛関係にあるが、クロエは最近急にストレフォンに対してつれなくなった。それは彼女の精神的な成熟が原因であるのに、彼は自分が嫌われたと勘違いをする。彼が他の娘に気を奪われていると嫉妬していたぐらいいだったクロエは、心変わりした現在の心境を次のように述べる。

What does it matter what I did when I was a baby? Nothing existed for me then except what I tasted and touched and saw; and I wanted all that for myself, just as I wanted the moon to play with. Now the world is opening out for me. More than the world: the universe. Even little things are turning out to be great things, and becoming intensely interesting. (Part V, 569)

私が赤ん坊の時にしたことが、何だっておっしゃるの？ あの頃、味わったり、触ったり、

見たりするほかには、私には何もすることがなかった。だから、私は自分でそんなことがしたかったのです。一緒に遊ぶために月を欲しがったりしたようにね。今、私には世界が大きく開きかかっています。世界よりもっと大きなもの、宇宙です。小さなものでさえ大きなものになって、とても面白くなっていくのです。

成熟しかけた彼女は感覚的な生活から抜け出し、精神的に自由だと感じたり、世界が開けてくるような高揚感を味わったりする経験を話す。「未熟期」のストレフォンには、そんな素晴らしさなど知り得ようもない。つまり、彼にとっては肉体に依存した感覚的な快楽しか分からず、精神的に成熟した時の「生の恍惚」がどんなものであるかを想像することができない。クロエは、感覚的な快楽を追求している間は、人生には生きている価値がないと言う。「創造的進化」において、唯物的な外的世界に惑わされず、精神性を重視することが大切であることがここでも説かれている。

「未熟期」の人間エイシス Acis と「女古代人」The She-Ancient が登場する。「女古代人」は、エイシスが卵を孵化させようとするのを手伝うためにやってきた。やがて卵が孵化して、アマリス Amaryllis という娘が誕生する。アマリスの誕生に際し、「女古代人」は「未熟期」の人間たちに人生の諸段階を説明する。

6-2 第5部 その2

予定されていた芸術家の祭りが始まると、祭りの展覧会に出品することになっている2人の彫刻家アージュラクス Arjillax とマーテラス Martellus、そして彼らの芸術の理解者エクレイシア Ecrasia が共に登場する。エクレイシア

はアージュラクスの作品を今までとても高く評価していて、今回も非常に期待していたのだが、裏切られたと不平を言う。なぜなら、アージュラクスがモデルとして見栄えのしない古代人たちの胸像ばかりを作ったからである。エクレイシアの非難に対し、アージュラクスは古代人の「心の強さ」“the intensity of mind”を描くためにもっぱら古代人たちをモデルとした。彼は、美の対象を「お菓子」“confectionery”のような感覚的で空虚なものから、精神的に深遠なものへと移して行ったのである。もう一人の彫刻家マーテラスは、今回は出品しなかった。マーテラスもかつては古代人たちの胸像を造っていたのであるが、自分の手でそれを壊してしまった。なぜなら、彫像には生命を吹き込むことができないし、そのようなものは単なる偶像でしかないからである。美のテーマが感覚的なものから精神的なものへと移行していくのは多少の進歩であることには違いないが、究極的には彫像は「生命」そのものになることはない、と彼は悟った。彼は、精神性の深さをテーマにすることをアージュラクスよりも先に経験していたのである。彼は次のように言う。

A live ancient is better than a dead statue . . . Anything alive is better than anything that is only pretending to be alive . . . As your [Arjillax's] hand became more skilful and your chisel cut deeper, you strove to get nearer and nearer to truth and reality, discarding the fleeting fleshly lure, and making images of the mind that fascinates to the end . . . In the end the intellectual conscience that tore you away from the fleeting in art to the eternal must tear you away from art altogether, because art is false

and life alone is true. (Part V, 588)

生きている古代人の方が死んだ彫刻よりましだよ。……すべて生きているものは、生を装うものよりましだ。君(アージラクス)の腕がもっと冴えて、君のノミがもっと深く切れるようになれば、君はもっと真実と現実に近づこうと努力するようになり、はかない肉体の誘惑を捨てて徹底的に魂を魅了するような心の像を造るようになる。芸術におけるはかないものから君を引き離して永遠と向かわせたその知的良心は、ついには君を芸術のすべてから引き離すに違いない。なぜなら、芸術は偽りであり、生のみが真実だからだ。

マーテラスは、自分が出品しない代りに別の芸術家を連れてきた。それは、科学者のピグマリオン Pygmalion である。ピグマリオンは2つの生き物に生命を吹き込むことに成功した。脳を開発し、消化器と生殖機能も整えた。手足の作成は、マーテラスが手伝った。やがて、ピグマリオンがつくった男女2人の人造人間が登場する。

6-3 第5部 その3

ピグマリオンが作った2体の人造人間のうち、男の方はオジマンディアス Ozymandias、女の方はクレオパトラ・セミラミス Cleopatra-Semiramis である。ピグマリオンは生きた人間を作ることができたと思っていたが、その作成を手伝ったマーテラスは、それは「自動人形」“automaton” に過ぎないと批判する。なぜなら、その生き物は、ただ刺激に対して反応するだけだからである。この「自動人形」は、動物主義的に行動する現代人になぞらえてショーが痛烈に諷刺するものである。意志や自制心をも

たない人間は「自動人形」と変わらない。「新聞を読んでいないので自分の意見を述べることができない」「I have not seen the newspaper today.” (Part V, 601) というオジマンディアスのように自分の意見がないということは、自分の意志も思想もないわけで、真に生きていることにはならない。刺激に対して反応だけをくりかえす「自動人形」には、人間にとって大切な想像力を働かせることもなければ、「意識」を発展させる可能性もない。一言で言えば、創造性がないのである。現代人は人の言うことを鵜呑みにしたり、自分なりの意見を言えなかったり、あるいは扇動家によって戦争の道を歩まされたりする。それは思考が足りないからである。これまで見てきたとおり、「創造的進化論」において、自分の判断で自分の行動を律するのは「意志」や「良心」の働きである。ピグマリオンは、自分の作った「自動人形」が実験室で造られたものとしては最高のものであるけれども、自然の創造物にはかなわないと告白する。「自動人形」と自然の創造物との違いは「意志」と「意識」であることは言うまでもない。

オジマンディアスは、自分たちが不完全な人造人間であるにもかかわらず、卵生である「未熟人間」たちを軽蔑する。クレオパトラとオジマンディアスが男女の優位をめぐる口論を始める。ピグマリオンが仲裁に入ろうとすると、クレオパトラがピグマリオンの手を噛む。あえなくピグマリオンは死んでしまう。「不慮の死」である。西暦30000年の未来社会の人間たちは、「不慮の死」でしか死ぬことはない。ピグマリオンは、本来は不死であったのに「不慮の死」で人生を終わらせてしまったのである。ピグマリオン殺害という重大事態の收拾のため、「男古代人」が呼び出される。男女の「自動人形」はピグマリオンを殺した罪をなすりつけあう。

「男古代人」が男女の「自動人形」の手を取り、空いた手を頭の上ののせて精神エネルギーを注入するポーズをとると、急激な進化エネルギーは彼らを消耗させ、彼らは2人とも死んでしまう。

ただ漫然と刺激と反応を繰り返し、何の反省も自制もない人造人間が無為の中で死んでいく様子は、精神性が低く目的意識の乏しい現代人に対する痛烈な皮肉となっている。

6-4 第5部 その4

2人の「自動人形」が死んだあと、「男古代人」は「未熟期」の人間たちに訓戒を与える。彼によると、人間は子どものうちは人形で遊ぶ。人形とは「芸術作品」のことをさす。彫刻を作ったり、絵を描いたり、物語を作ったり人形芝居をしたりする。これに飽き足らなくなって、人間たちはピグマリオンのように、さらに実物に似せた「自動人形」を作ろうとするが、たとえどんなに実物に近づこうとしても、実物そのものにはなり得ないのだから、それらはすべて幻影である。

ピグマリオンの「自動人形」たちの死の教訓から、刺激と反応の「自動人形」は「意志」が介在しない言わば「物質」であることが分かる。生きた人間と言えるには、「意志」のみならず「意識」を持たなければならない。進化を成就するという目的意識のない人間は「自動人形」と同然である。進化目的、すなわち「意識」の拡張と発展を望まない人間は、いわば「退行」して、あえて「自動人形」であり続けようとするのである。人形を愛好する世界から遠ざかることは「愛と幸福」の自己満足の生活から離れることになってしまうので、それは彼らにとって一種の恐怖である。人形を愛好する者たちは、感覚的欲望生活を確保できればよいのであって、精

神生活を得ることをあきらめてしまう。だが、それでは「真の生活」を送ったことにはならないし、人間の本性を裏切っていることになる。

ショーは「愛と幸福」を求めることを全面否定しているわけではないが、感覚的欲望生活を追い求めるだけでは動物レベルにとどまっているわけで、そこから抜け出して精神性を深めることの重要性を説いているのである。同じ芸術でも、「未熟期」の人間の取り扱う芸術と成熟しかけた人間の芸術とは精神性の深さが違う。

「未熟人間」エイシスは、最近一人で山に登って考えることが多い。成熟しかけているのである。すでにエクレイシアと一緒に彫刻することや遊ぶことを好まなくなっている。エイシスが芸術家肌のエクレイシアに、芸術が精神を反映したものでなければ意味がないと言うと、エクレイシアは少し腹を立てる。彼女によると、芸術は美の創造であるから、美しくなければならない。芸術の中には現実の生活からは得られない「幸福」を見いだすことができると主張する。だが、彼女の考える美は物体的な美にとどまっているのに対し、エイシスの考えている美は精神が放つ崇高な美である。「女古代人」が次のように芸術について述べる。

Art is the magic mirror you make to reflect your invisible dreams in visible pictures. You use a glass mirror to see your face: you use works of art to see your soul. But we who are older use neither glass mirrors nor works of art. We have a direct sense of life. When you gain that, you will put aside your mirrors and statues, your toys and your dolls. (Part V, 617)

芸術は、あなたが見ることのできない夢の見える絵として映し出してくれる魔法の鏡

なのです。あなたは自分の顔を見るには鏡を使うでしょう。自分の魂を見ようとする、芸術作品が必要です。だが、もっと歳をとった私たちは、ガラスの鏡もいないし、芸術作品もいない。私たちには、人生を直かに感じる感覚があります。あなたにもその感覚がそなわったら、鏡、彫刻、玩具、人形なんか放ってしまうでしょうね。

「神性」「godhead」に至る精神にとっては、肉体は仮の宿であり、たとえどれほど芸術が精神性をたたえても、造形であるかぎりは生命ではないし、純粋な精神でもない。「創造的進化」において、究極的には物質は必要ではなくなり、ただ「精神」や「意志」や「生の力」「Life Force」だけが生命の担い手となる。

6-5 第5部 その5

これまで「成熟期」の「男古代人」と「女古代人」は、成熟していく過程で「意志」を働かすことによって自由に肉体を創造できるようになった。それについて「女古代人」は「未熟期」の者たちに次のように話す。

When I [THE SHE ANCIENT] discarded my dolls as he [THE HE ANCIENT] discarded his friends and his mountains [his dolls], it was to myself I turned as to the final reality. Here, and here alone, I could shape and create. When my arm was weak and I willed it to be strong, I could create a roll of muscle on it; and when I understood that, I understood that I could without any greater miracle give myself ten arms and three heads. (Part V, 619)

彼(男古代人)が彼の友人と山々(彼の人形)

を捨てたように、私(女古代人)が自分の人形を捨てた時、最後の事実として私は自分を私自身へ向けたのです。そこにおいてだけ、私は形作ったり、創造したりすることができました。私の腕が弱くてそれを強くしようと意志する時、その上に一本の筋肉を創造することができたのです。それが分かった時、奇跡などということではなく、私は10本の腕と3つの頭を私自身に付け加えることができるということが分かったのです。

外部に人形(芸術)を求めることをやめて、「女古代人」は関心を自分自身に向けた。すると、「意志」を働かせることによってどのようにでも肉体を創造することができるようになった。彼女は10本の腕を持ち、3つの頭を持ったりして自由に肉体を作り変えることができた。時には、12本の脚や手、100本の指、4つの頭、8つの眼を持つこともあった。しかし、しばらくして彼女は、そのような多くの頭や手足のある怪物じみた肉体の仕組みは生きていく上で何の意味もないことに気づく。どんなに自由自在に身体の形を変えることができて、所詮、肉体は「自動人形」ようになる。最初は「意志」を働かせて行動しても、次第にその行動は習慣化していき、「意志」の働きはなくなる。マニュアル化した行動は、無意識的となってロボットのようになるのである。

「古代人」たちは絶え間無い進化の衝動に駆られており、ロボット化した状態には精神的に満足しないのである。彼らは肉体に対して完全な支配力を得た。だが、「精神」が肉体に宿っている限り、肉体に依存していることに変わらない。それでは、肉体に束縛されて永遠の生命に到達することができない。そこで、彼らは最終的には肉体の束縛から解放され、「意志」だ

けで存在するという目標を立てた。それが最終的進化の在り方なのであるが、はたして肉体を持たないものが人間といえるかどうか。ところが、この劇の「補遺」Postscriptに示されているように、肉体を捨てた際の人間の不滅性をショーは半ば本気で信じているように思われる。

Immortality is natural, death only an artifice to make it bearable as a burden and get rid of its garments of flesh as they wear out. The legend of Methuselah is neither incredible nor unscientific. (Postscript to BM, 696)

不滅性は自然であり、死は不滅の重荷を耐えることができるように、使い切ったようにして肉体を脱ぎ捨てる唯一の手段である。メトセラの物語は信じられない話でもなく、また非科学的でもない。

このように、「古代人」たちは精神の重要性を説き、遠大な進化目標を説くのであるが、まだ芸術の世界にとどまっているエクレイシアにはその深遠な意義は分からない。だが、マーテラスは「古代人」たちの言うことが少しずつ分りはじめる。マーテラスによると、肉体は最後にはやっかいなものとなり、思想以外に美しく興味深いものはない。思想は生命そのものであるからだ。「古代人」たちはマーテラスの言葉を聞いて満足する。「古代人」たちは最終的には「渦巻き」「Vortex」になりたいと考えている。「Vortex」とは、肉体を持たない「精神」そのもののことをいう。到底、「未熟期」の人間たちの理解は得られない。「古代人」たちによると、かつては肉体が「渦巻き」の奴隷であったが、今ではそれが逆になっている。肉体というものは精神にとって耐え難いものだ。「古代人」たちはそう言って、「未熟期」の人たちに進化

の最終目標を理解させることに失敗したという印象をもちながら立ち去る。

ストレフォンは自殺をほのめかし、マーテラスは女には飽きてしまったから数学を勉強しようと言い出す。数学は、感覚的なものと相いれない純粋に知的な満足を与えてくれるからである。アージュラクスも「古代人」たちの感化を受けて、少しではあるが成熟して去って行く。

「未熟期」の人たちが散ってしまうと、暗くなった森の空地に数々の幽霊が現れる。アダム、イヴ、カイン、蛇、リリスの幽霊である。彼らは自分たちのしたことを次々に述べる。アダムは大地を掘り起こして生産のために労働し、イヴと協力して愛によって子供を作った。カインは殺人と戦いを発明した。蛇は知恵と善悪の知識を生み出した。

劇の結末で、アダムとイヴを生んだリリスが長いセリフをとうとうと語る。リリスによると、紀元30000年の人間は永遠の生命という重荷を背負い込む。彼らは進化して肉体が貧弱なものになっている。紀元前からの人間の過去の所業を歴史的に見てみると、人間は神の仕事を充分成し終えていないように思われる。それ故、人間の代りとなる新しい生物を造る必要があるのではないだろうか。ところが、紀元30000年の人間の中には、物質を超越した「渦巻き」という「知性の力の旋風」に向かって突進し、生命を物質から解放しようとしている者もいる。彼らは沈滞を恐れ、好奇心を持ち続け、希望と信頼を忘れていない。そこで、リリスは人間を一掃して別の新しい生物に神の仕事をさせるという考えを捨てて、人間が物質から解放された「渦巻き」になることを実現するまで待つことにする。

リリスの長いセリフは、この劇のしめくりとしてふさわしいものである。ショーが提唱す

る「創造的進化」のねらいが簡潔に、しかも明瞭に述べられているからである。彼は物質主義を乗り越え、創造的精神主義的によって人類が生存することを願っているのである。

7. おわりに

物質主義的な生き方は、行き着くところ破壊と戦争を生み出す。それに伴って残忍と偽善が横行し、文明は滅亡の危機に瀕するようになる。人間にとって克服しなければならないものとは、このような生命の活力を失わせる物質主義である。ショーは『メトセラへ還れ』の中で、遠い未来において、「生の力」が人間の「意志」に働きかけ、その結果、人間は肉体から解放されて知性の力である「渦巻き」へと進化していくという「創造的進化」のヴィジョンを示した。

「創造的進化論」は、そもそも生存競争と自然淘汰説を採るダーウィニズムに対抗して現れたものである。人間は、物欲だけで生きるのではなく、何か「高次の精神的なもの」によって生きているはずだというのがショーの主張である。彼によると、人間の本来の健全な生活とは精神的に豊かな生活である。「創造的進化論」は、新しい自己と新しい環境を作り出す人間の「意志」の働きを重要視する。ところが、人間の中には、「意志」を持たず、自分で「自立」の機会をのがしている者がいる。つまり、感覚的な満足と享樂的な人生を送ることだけに熱心な彼らは、精神的な向上が大切であることは分かっているものの、なかなかそれを実践する努力をしない。怠惰な心の持ち方が「自立」を妨げている。「創造的進化論」は、自己が惰性に眠ることのないよう絶えず自己変革をし、「高次の存在」になることを目標に創造の情熱をたぎらして向上することを目指している。

ショーによると、人間は運命に翻弄され偶然性によって適者生存といったものに振り回される受動的な存在となるのではなく、「意志」によって「進化目的」に向かって自分の運命を切り開く存在でなければならない。「創造」は「生命」そのものであり、「生命」が本領を発揮する時、「創造」は現実のものとなる。ショーはまさに預言者的な態度でこの劇を書いた。この長編劇を通して、彼は現代文明における科学の盲信に警鐘を鳴らし、物質的・感覚的な欲望生活から抜け出して知的・精神的に生きることの大切さを我々に伝えたのである。

注

- 1) 「創造的進化論」は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン Henri Bergson (1859-1941) が有名だが、ベルクソンは「知性」よりも「直観」に注目したのに対し、ショーはあくまでも「知性」の可能性に信頼をおいたところに特徴がある。
- 2) ショーは自分の提唱した「創造的進化論」を「20世紀の宗教」とした部分は次の箇所である。“Creative Evolution is already a religion, and is indeed now unmistakably the religion of the twentieth century.” (*The Bodley Head Bernard Shaw: Collected Plays with their Prefaces*, Vol. V, “Preface” to *Back to Methuselah*, 332) また、ショーは20世紀の聖書として『メトセラへ還れ』を書いたと次のように言う。“I have written *Back to Methuselah* as a contribution to the modern Bible.” (“Preface” to *Back to Methuselah*, 269)
なお、本論における *Back to Methuselah* からの引用は *The Bodley Head Bernard Shaw: Collected Plays with their Prefaces*, Vol. IV (Ed. Dan H. Laurence, London, Reinhardt, 1974) からのものである。
- 3) *Back to Methuselah* の副題として、“A METABILOGICAL PENTATEUCH” (超生物学

- 五書)が記されている。
- 4) この場面は、ショーが『人と超人』で提示した「創造的進化」の原動力である「生の力」“Life Force”を思い起こさせる。
 - 5) 「妊娠」を示すのに“pregnant”ではなく「想像」“conceive”という単語を使っている点に含蓄がある。“dead”や“born”や“conceive”という言葉がすでに蛇から繰り出されているが、他にも次のような言葉が、蛇の口から紡ぎ出される。「奇跡」“miracle”，「詩」“poem”，「不滅」“immortality”，「延期」“procrastination”，「他人」“strangers”，「愛」“love”，「嫉妬」“jealousy”，「恐怖」“fear”，「希望」“hope”，「結婚」“marriage”，「誓約」“vow”，「機会」“chance”などである。
 - 6) 原文は，“Through him and his like, death is gaining on life.” (Part I, Act II, 376)
 - 7) 原文は，“Every dream could be willed into creation by those strong enough to believe in it.” (Part I, Act II, 374)
 - 8) フランクリンは，“Life is too short for men to take it seriously.”と言っている (Part II, 381)。
 - 9) メトセラMethuselahはアダムの息子セスSethの系統で、その7代の孫にあたる。969歳の生涯を生きた「旧約聖書」の最年長者である。
 - 10) ショーは、想像力には“the romantic imagination”と“the realistic imagination”の2種類があると説き、後者によって現実をしっかりと認識することが肝要だと言う (“Preface” to *Misalliance*, *The Bodley Head Bernard Shaw Collected Plays with their Prefaces*. Vol. IV, 138-9)。